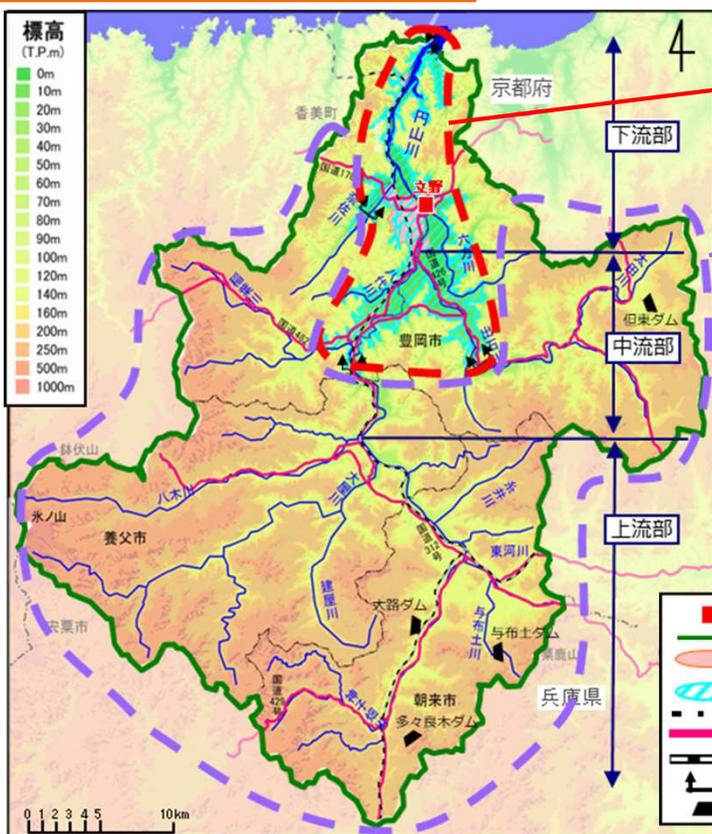


気候変動を踏まえた「円山川水系河川整備基本方針」変更の概要

まるやまがわ

- 長期的な河川整備の目標となる洪水（基本高水）のピーク流量を、基準地点立野において $6,400\text{m}^3/\text{s}$ から $7,300\text{m}^3/\text{s}$ に変更し、基本高水の流量を河道と洪水調節施設等に配分。
- 気候変動の影響による洪水外力増大に対し、既存施設の有効活用や新たな貯留・遊水機能の確保、河川環境・河川利用や地域社会への影響等を総合的に勘案して検討し、河道配分流量を $5,600\text{m}^3/\text{s}$ 、洪水調節流量を $1,700\text{m}^3/\text{s}$ とした。
- ため池の事前放流、田んぼダムの整備、雨水幹線・雨水貯留浸透施設の整備等、流域治水の取組の更なる推進を図る。

河道と洪水調節施設等の設定の考え方



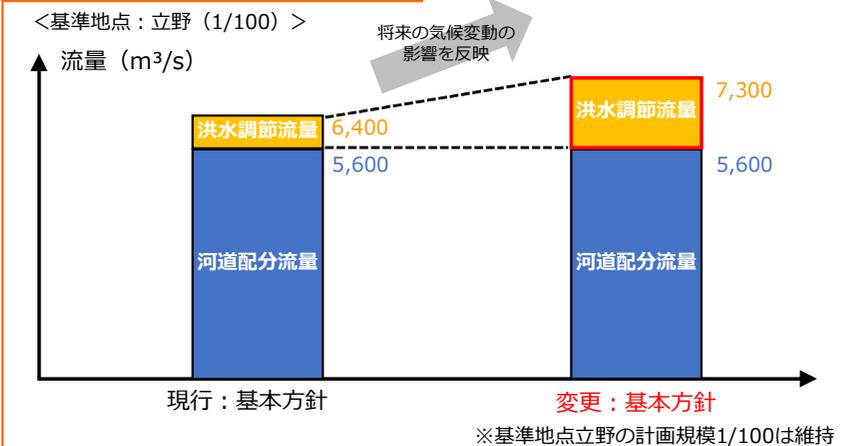
【下流域】
 ・河川環境・河川利用への影響等を踏まえて河道配分流量の増大の可能性を検討
 ・本・支川も含めて、新たな貯留・遊水機能の確保の可能性を検討

【中・上流域】
 ・既存ダムの有効活用や、新たな洪水調節施設の可能性など、本・支川も含めて、貯留・遊水機能の確保の可能性を検討

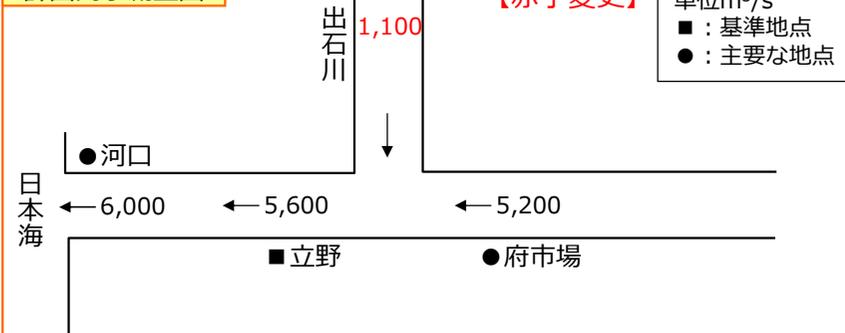
- 基準地点
- 円山川流域
- 市街化区域
- 想定氾濫区域
- 市町界
- 国道
- 鉄道(JR山陰本線)
- 大臣管理区間
- 既設ダム



河道と洪水調節施設等の配分流量



計画高水流量図

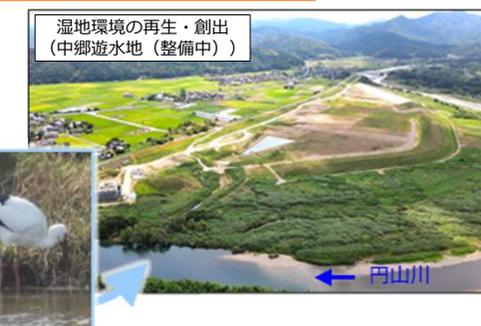


河道での対応

- 狭窄部のわずかな平地に宅地や鉄道、主要道路があることから、山切り等による河道拡幅は困難である。また、河道内には多様な自然環境を有する高水敷等が存在することから、高水敷等の掘削は困難である。このため、河道配分流量を $5,600\text{m}^3/\text{s}$ で維持する。



洪水調節施設等での対応



- 既存施設の有効活用や新たな貯留・遊水機能の確保により、洪水調節流量を $1,700\text{m}^3/\text{s}$ とする。
- 貯留・遊水機能の確保にあたっては、コウノトリと人が共生する環境の再生を目指し、湿地再生や河川と水田の連続性確保、良好な自然環境の保全・再生・創出を図る。